道有林におけるコスジオビハマキの発生状況（1975 年）

上条　一昭　　東浦　康友

1974 年の発生状況の報告（光珠内季報 22 号）でのべたように，これまで６年間各林務署にお願いしてきた調査は，ハマキガの大発生が一応おさまったということで，今年からは中止にした。それで今年調査をしたのは，私たちの固定調査地のうち４箇所（旭川林務署 78，79 林班，滝川林務署 36 林班，当場内のトドマツ集植所）だけで，６月上～中旬にかけて行なった。この，夏の気候は６月下旬から８月はじめまで，日射量が極端に少なかったが，ハマキガの生育期をはずれたため，幼虫の生長速度は例年並だった。

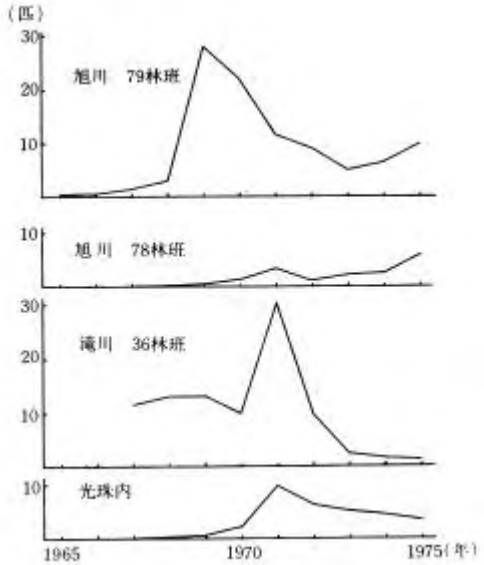
調査の結果は表－1 に示し，さらにこの 10 年間のコスジオビハマキの個体数変動を図－１に示した。これらから明らかなことは，滝川の 36 林班と光珠内では個体数が減ってきているのに対し，旭川ではコスジオビハマキをはじめとしてハマキガ類がふたたび増えはしめたことである。とくに 79 林班ではコスジオビハマキとトドマツアミメハマキがそれぞれ 9.9 匹と 11.4 匹，ハマキガ類合計では 28 匹にもなった結果，樹冠の上部を除いては新葉の赤変が目立ち，木によっては新葉のほとんどが加害されたものがあった。

旭川の 78 林班は 79 林班と同一斜面にある若い造林地（昭和 28 年植栽）で，はじめは幼齢

表－１　1974 年と1975 年のハマキガ数（50cm の枝1 本当りの数）

調査地 ＼ 樹名		コスジオビハマキ	トウヒオオハマキ	タテスジハマキ類	モミアトキハマキ類	トドマツアミメハマキ	トドマツメムシガ	トドマツチビハマキ	その他のハマキガ類	ハマキガ類合計
旭川　79 林班	1974 年※	6.67	1.12	0.38	0.35	9.32	4.55	0.90	0.07	23.35
	1975 年	9.90	2.35	0.63	0.45	11.38	2.82	0.48	0.02	28.03
旭川　78 林型	1974 年	2.52	0.68	0.45	0.17	0.12	1.35	0.42	0	5.70
	1975 年	5.85	0.67	1.18	0.10	0.15	1.95	0.60	0.03	10.53
滝川　36 林班	1974 年	1.55	0	0.03	0.48	0.73	0.50	0.45	0.15※	3.89
	1975 年	1.40	0.05	0.23	0.33	0.28	0.70	0.05	0.03	3.05
光珠内	1974 年	4.17	0.28	2.75	0.53	2.75	0.02	0.05	0.03	10.58
トドマツ集植所	1975 年	3.64	0.34	2.12	0.22	1.90	0.02	0.04	0.07	8.35

※　訂正：1974 年の報告（光珠内季報 22:14）の表－１の中で，旭川 79 林班の個体数および滝川 36 林班の「その他のハマキガ類」の数がまちがっていたので，ここで訂正する。



図－１　コスジオビハマキノ個体数の変動
(1965～1975 年)
個体数は50cm の枝1 本あたりの数。
なお，滝川36 林班だけは1967 年より調査開始。

林型ハマキガであるクロタテスジハマキが優占していたが，1969 年からコスジオビハマキがふえだした。1972 年に一たんは減少したがまた次第にふえて今年は１枝あたり６匹近くになった。それも 79 班の古いトドマツ造林地に近い木ほど個体数が多くて，30 匹を越す木もみられ，このような木では全新葉が食害されてしまった。

当麻にある 73 林班では，1974 年には前年よりもほんのわずか個体数が増加していたが，木が高くて枝が枯れ上って危険なため,今年からは調査を打ち切った。ここでも今年の被害は大きく，枝の赤変の状態からみて，79 林班と同じくらいのハマキガがいたと思われる。

このほか今年増加したところに，野幌育種場のトドマツ集植所がある。ここではコスジオビハマキは光珠内とよく似た経過をたどっていたのが，昨年から増加をはじめ，今年は詳しい調査はしなかったが，被害の程度から判断すると８～９匹にはなったであろう。

以上のように今年は，昨年やや増加をみせていた林分で予想外に個体数がふえて（これは表－１で訂正したように，昨年うっかりして旭川の 79 林班の個体数を 78 林班のものと，とりちがえてしまったことが大きな原因である）被害がひどかったので，急きょ道有林にお願いして各林務署のこれまでの調査地の点検をしていただいた。その結果，美深，名寄，岩見沢の林務署で部分的に枝の赤変しているのが認められたが，旭川のようにひどくはなく，微害程度とのことだった。道有林で昨年コスジオビハマキの数が増加したところは旭川のほか，美深，留萌であったが，これらを含めて何箇所か今年になって数のふえたところがあると思われる。このような林分では来年もひきつづき増加する可能性が大きいとみな方がよいだろう。

(昆虫野兎鼠科)